

世間には技量は充分にありながら古人先輩の遺法に専ら従はんとする畫家尠からず。元より不可なしと雖も亦た中には獨立獨行して研究を怠らざる畫家あり。之れ誠に注意を値す。我熱心により發明せる處こそ眞に技術上有力なる進歩にして尙且つ同輩をも鼓舞獎勵するの道ともなるべし。

技量非凡にして着想亦群を抜ける畫家あり。併し此の如きは多く得難き上に往々眼界狹隘にして一方に偏し且つ奇に走るの嫌なきに非らず。先天的技能あらずとも練磨の功は天才畫家に一步も譲らざるものあり。之れ大家と云ふべきものにして能く人世の機微を描出し他の及ぶ可からざるものあり。此の如き畫家にして甫めて美術の指導に任ずべし。

如何に技量はあらんとも唯畫がかけるのみの畫家にては不可なり。想像力に乏しく又た活氣なきに於ては之れ缺點と云はざる可からず。目に見ゆる通りを畫くのみにて自然を凡て靜物の如く心得少しも發明する所なければ何の妙味もなきものなり。

△ △ △

畫といふものは兎角同じになりたがる。一種の型が出来たがるものだ。此型を崩すには寫生をやるよりほかに善い道はない。寫生をやめるとザキに型に這入つて仕舞ふ。書生時代には形を誤らず綿密丁寧に畫くことを勉強せにやいかん。これを措いては上達する見込はない。少し粗大な描き方は老年の結果か、又た非常に熟練して例へばヴェラスケスの様に、觀る物の要點を、甘く握る事の出来る様になつてからは別の事故ざと粗大に描いてはいかかん。筆の粗大と云ふものは、必要に迫られて、自然と現はれて來るもので、決して好でやるといふものじやない。(ノースコート畫談)